豊　前　国　府

昭和59年度発掘調査概報

豊津町文化財調査報告書

第３集

１９８５

豊　津　町　教　育　委　員　会

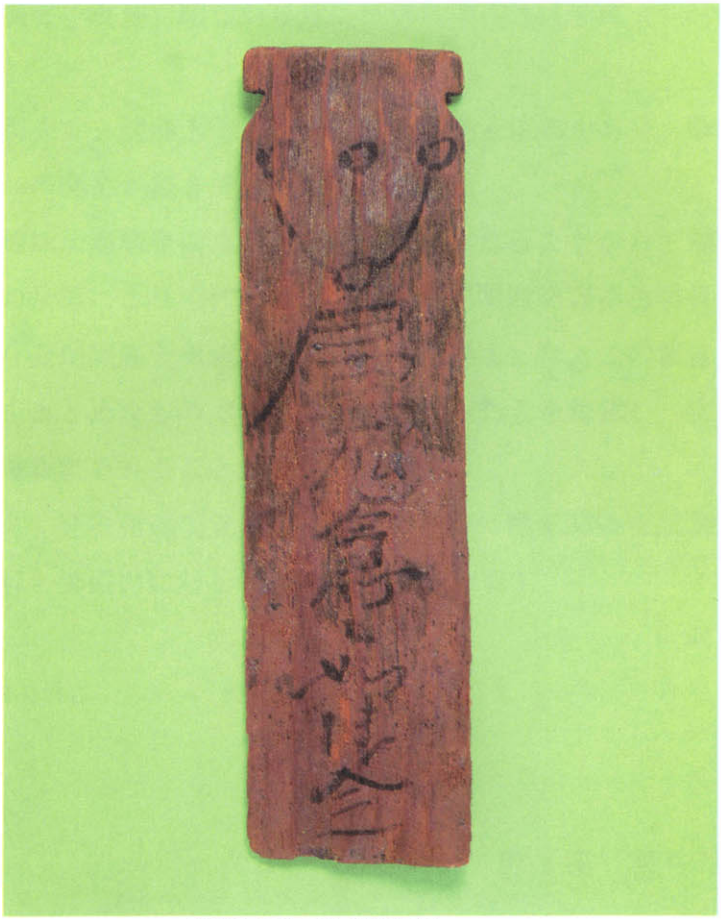
豊　前　国　府

昭和59年度発掘調査概報

国分・国作・惣社・草場地区航空写真（南より）（空中写真稲富提供）

惣社八幡周辺航空写真（南より）（空中写真稲富提供）

惣社八幡周近　総社八幡周辺航空写真（北より）（空中写真稲富提供）



荒堀地区井戸中出土呪符

序

豊津町教育委員会では、国県費補助を受け昭和49年度に豊前国分寺、寺域推定地発掘調査を実施、昭和51年度には惣社国作地区埋蔵文化財確認調査を行いました。

これらの調査で、豊前国府との関連を思わせる遺物があり、惣社国作地区の埋蔵遺跡への関心が高まりました。

将来この地域が圃場整備事業実施予定地にあたることから、福岡県教育委員会文化課の指導により昭和59年10月１日豊前国府発掘指導委員会を結成、11月16日より発掘調査を実施、多大の成果を得ました。この報告書は、発掘調査の概要をまとめたもので貴重な資料となることを確認し、広く識資に利用され学界に貢献されることを期待します。

末尾ながら、発掘指導委員発掘担当者ならびに地元関係者、土地所有者各位の深い御理解と御協力に対し深甚の謝意を表します。

昭和60年３月31日

豊津町教育委員会

教育長　吉　田　無佐治

例　　言

1．　本書は、豊津町教育委員会が国・県の補助を受けて昭和59年度に実施した豊前国府の発掘調査概要の報告である。

2．　発掘調査は、県営京築パイロット事業に伴う事前事業であり、３ヶ年継続調査の第１年次調査である。

3．　調査にあたっては、下記の各位より御指導、助言を得た。記して謝意を表したい。

豊前国府発掘調査指導委員会

横山　浩一　九州大学文学部教授

西谷　　正　九州大学文学部助教授

山本　輝雄　九州大学工学部助手

小田富士雄　北九州市立考古博物館館長

藤井　　功　福岡県立九州歴史資料館副館長

定村　貞二　豊津町町史編纂委員

4．　掲載の写真は石丸洋が撮影した。実測図は石松好雄・横田賢二郎・酒井仁夫が作成し、豊福弥生が浄書した。

5．　本書の執筆はⅠ～Ⅲ・Ⅴは酒井が、Ⅳは石松・横田が担当し、酒井が編集した。

本　文　目　次

頁

Ⅰ　位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査の経過 …… 4

Ⅲ　遺構 …… 7

Ⅳ　遺物 …… 11

Ⅴ　結語 …… 19

挿　図　目　次

頁
第１図　豊前国府跡位置図（１/10,000）…… 2
第２図　豊前国府推定地周辺遺跡分布図（１/25,000）…… 3
第３図　トレンチ配置図（1/3,000）…… 5
第４図　基準点位置図（1/3,000）…… 6
第５図　鳥居地区トレンチ図（1/200）…… 7
第６図　光り地区トレンチ図（1/200）…… 8
第７図　光り地区土層模式図…… 9
第８図　荒堀地区トレンチ図（1/200）…… 9
第９図　ＳＥ016井戸実測図（1/40）……10
第10図　徐来地区北トレンチ図（1/200）……10
第11図　徐来地区南トレンチ図（1/200）……10
第12図　鳥居地区出土土器実測図（1/3）……11
第13図　光り地区出土土器実測図（1/3）……13
第14図　荒堀地区出土土器陶磁実測図（10のみ1/4）……15
第15図　徐来地区出土土器実測図（1/3）……16
第16図　木製品実測図（1/3）……17
第17図　軒平瓦実測図……18
第18図　豊前国府関連推定地（1/50,000行橋）……20
第19図　推定豊前国府（日野尚志　1983）……21
第20図　国作に想定する豊前国府址（木下　良　1967）……21
第21図　豊前国府（国作跡）条坊復元図想定（木原武雄　1982）……22
第22図　条里からみた草場跡（木原武雄　1982）……23

図　版　目　次

巻頭１　国分・国作・惣社・草場地区航空写真（南より）
　　２　惣社八幡周辺航空写真（南より）
　　３　惣社八幡周辺航空写真（北より）
　　４　荒堀地区井戸中出土呪符

図版１　(1)　大山頂上より西方に国作地区を覗む
　　(2)　八景山より惣社地区を覗む
　　(3)　惣社八幡神社遠景
　　２　(1)　惣社八幡神社
　　(2)　貴布禰神社
　　３　(1)　翁神社
　　(2)　伽藍橋
　　４　(1)　伽藍橋横道標西面
　　(2)　　同　南東面
　　５　(上)　鳥居地区トレンチ（北より）
　　(下)　鳥居地区トレンチ（南より）
　　６　(1)　鳥居地区トレンチ（東より）
　　(2)　鳥居地区トレンチ（西より）
　　７　(1)　光り地区トレンチ（南より）
　　(2)　徐来地区北トレンチ（西より）
　　(3)　徐来地区南トレンチ（西より）
　　８　(上)　荒堀地区トレンチ（西より）
　　(下)　荒堀地区ＳＥ016
　　９　　鳥居地区・荒堀地区出土土器・陶磁器
　　10　　光り地区出土土器
　　11　　徐来地区出土土器
　　12　　ＳＥ016出土木製品・光り地区出土軒平瓦

Ⅰ．位置と環境

京都郡豊津町は京都平野を貫流する今川と祓川に狭まれた丘陵地及び沖積平野に展開する。豊津町は旧祓郷村（大字呰見・下原・有久・徳政・徳永・綾野・草場・田中・袋迫・国作・惣社）、豊津村（大字豊津・国分・彦徳）、節丸村（大字上坂・上原・吉岡・光富・節丸）の三村が合併して成立した行政区である。このうち平野部を占める祓郷村が最も広く、また肥沃である。豊津村は丘陵地とその間の小谷よりなり、かつては南郷村と称した。行路難渋な事から難行原と称したともいわれる。天保年間になって開拓され、錦原と称され、慶応２年に小倉藩はこの地に藩庁を置いている。[註1] 豊前国分寺は国分台地の西側丘陵上に、同国分尼寺は東側丘陵上に立地するが、度重なる戦火や開墾によって旧日の面影はない。節丸村は祓川の両岸に展開し、狭長な沖積平野の東西両側には深い山地が迫っている。上坂には法起寺式と思われる奈良時代廃寺が存在し、[註2] 水田下に巨大な塔心礎が埋まっている。

祓郷村の大字惣社・国作地区が今回の調査対象地区である。この地域には主軸を概ね35°東に傾けた条里地割がよく残っており、さらに惣社八幡宮周辺ではほぼ南北方向の地割が現在でも見られるところから、この範囲に方４町～６町の国府の所在が歴史地理学者を中心に推定されている。もっとも津熊説（旧京都郡・現行橋市津熊）や草場説（旧仲津郡・現行橋市草場）も否定されている由ではない。

国作・惣社の国府推定地内及び周辺ではこれまでに数度の調査及び遺物採集がなされている。昭和51年に推定地北側の幸木遺跡が発掘調査され、微高地の斜面に直交する南西―北東方向の大溝が検出されている。内部の堆積層中からは、９～10世紀代の須恵器・土師器・陶磁器が出土している。[註3] 当遺跡調査に並行して行われていた県道工事に際しては、顕著な遺構は認められなかったが、多量の土師器・須恵器の他、若干の陶磁器が出土している。平安時代の所産といわれる。[註4] 昭和55年、国府推定地の中央部に当る御所において町道側溝工事が行われ、２本の溝中から多量の土師器・陶磁器が出土している。12世紀に属する一括遺物である。[註5] 惣社八幡宮の南側微高地からは須恵器を伴って瓦類が出土しているが、このうち軒丸瓦は豊前国分寺出土例と同笵瓦と考えられている。[註6] 八幡宮周辺の町道側溝工事に際しても須恵器・土師器と共に瓦類が出土しており、[註7] 御所でも布目瓦が採集されている。[註8]

以上記した各地点出土品を見ても、この範囲に８世紀から12世紀にかけての遺構が広く分布していることが推定され、中小路・御所・古門・伽藍橋という小字名からも、国府がこの地にあった可能性は極めて高いと思われる。

なお、惣社八幡宮には平安時代創建当初に奉納されたと思われる唐式六稜鏡一面が現存して

いる。[註9]

註1　伊東尾四郎編『京都郡誌』復刻版　1975

2　酒井仁夫・高橋章「豊前における八世紀代の軒先瓦について」『九州考古学』(未刊) 定村責二編『豊津町誌』豊津町　1985

3　豊津町教育委員会『幸木遺跡』　1976

4　註3に同じ

5　井上裕弘氏の教示による。

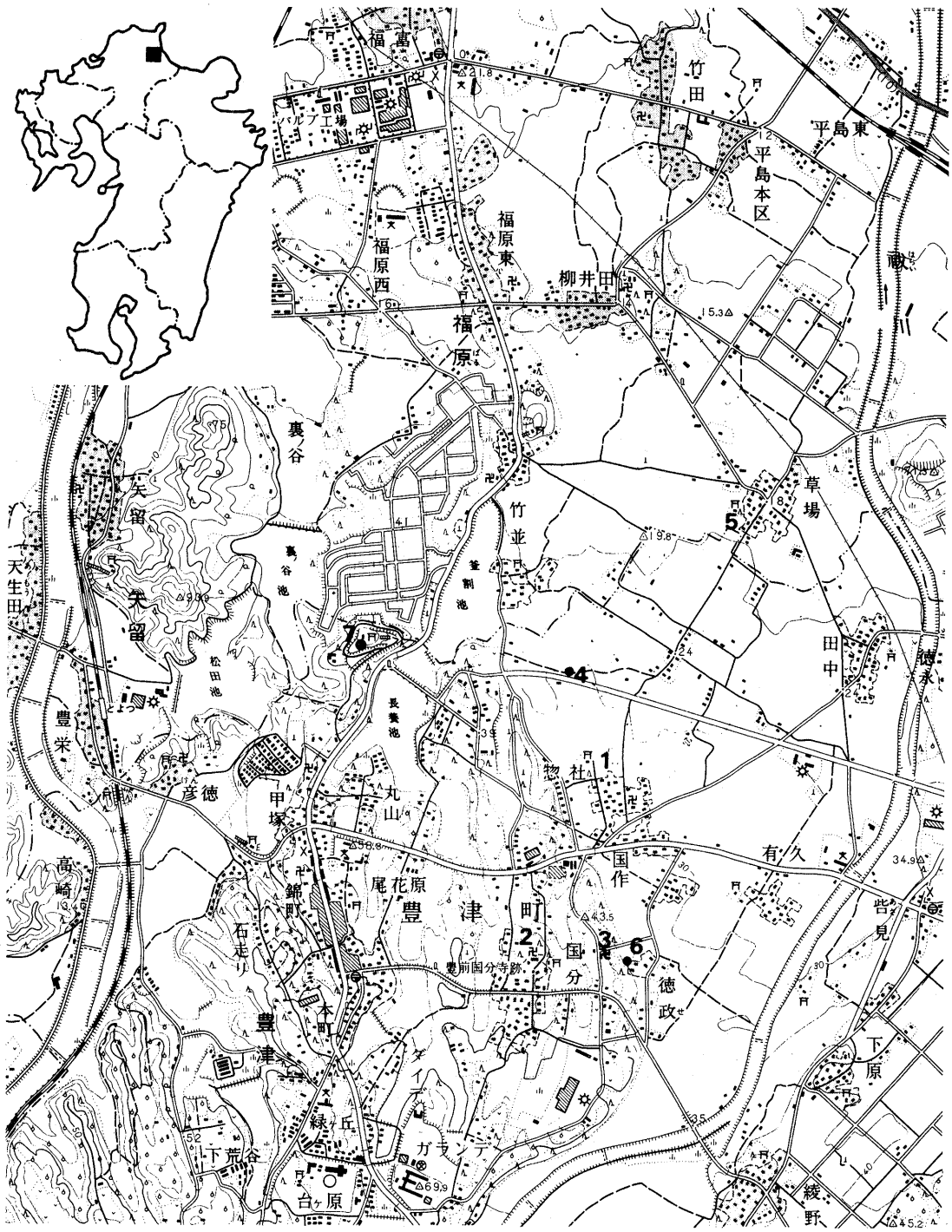
6　前原平三郎「豊前国庁址と瓦」『地域相研究』4　1978　武末純一「豊前国府跡」『九州古瓦図録』

7　大八木信之氏の教示による。

8　木原武雄「豊前国府についての一考察」『美夜古文化』No.22　美夜古文化懇話会　1976

9　定村責二編『豊津町誌』豊津町　1985

第1図　豊前国府跡位置図 (1/10,000)



第2図　豊前国府推定地周辺古代遺跡分布図（1/25,000行橋）

1. **豊前国府推定地**　2. 豊前国分寺　3. 豊前国分尼寺　4. 幸木遺跡
5. 草場八幡宮　6. 徳政瓦窯跡　7. 八景山祭祀遺跡

II. 調 査 の 経 過

豊津町においては昭和？年以来町全域の林野・圃場にわたって県営総合パイロット事業が実施されており、各年次にわたって文化財保護についての協議を県行橋農林事務所及び町パイロット対策室と実施してきた。奈良時代寺院跡である上坂廃寺保存のための遺構確認調査では東に塔、西に金堂、北に講堂を持つ法起寺式の伽藍配置を類推させる資料を得、また多量の瓦を検出した。田中地区では昭和57・58年度に試掘調査を実施した。その結果、弥生時代から中世にかけての遺物が砂層及び礫層中から若干発見されたが、当該地区は祓川西岸の氾濫原であると確認された。

昭和62年度以降には惣社・国作地区の圃場整備が計画されているが、当地域は豊前国府跡の所在が推定されている最有力地であるため、町教育委員会は県教育委員会と協議を重ね、昭和59年度から３ヶ年計画で発掘調査を実施する事になった。

発掘調査に先立って、国土地理院三角点に基づく実測基準点を設置した。その成果は次のとおりであり，位置は第４図に示している。

第１表　実測基準点一覧表

地 点	X	Y	H	備 考
No. 1	75.721.31 (0.00)	−1.388.50 (0.00)	28.012	字 鳥 居
No. 2	75.957.98 (236.67)	−1.480.88 (−92.38)	25.816	字 光 り
No. 3	75.826.96 (105.65)	−1.261.62 (126.88)	26.826	字 御 所
No. 4	75.614.79 (−106.52)	−1.386.83 (1.67)	27.648	字 鳥 居
No. 5	75.507.95 (−213.36)	−1.346.78 (41.72)	27.291	字 前 田
No. 6	75.426.41 (−294.90)	−1.389.50 (−1.00)	27.961	字口ヶ坪

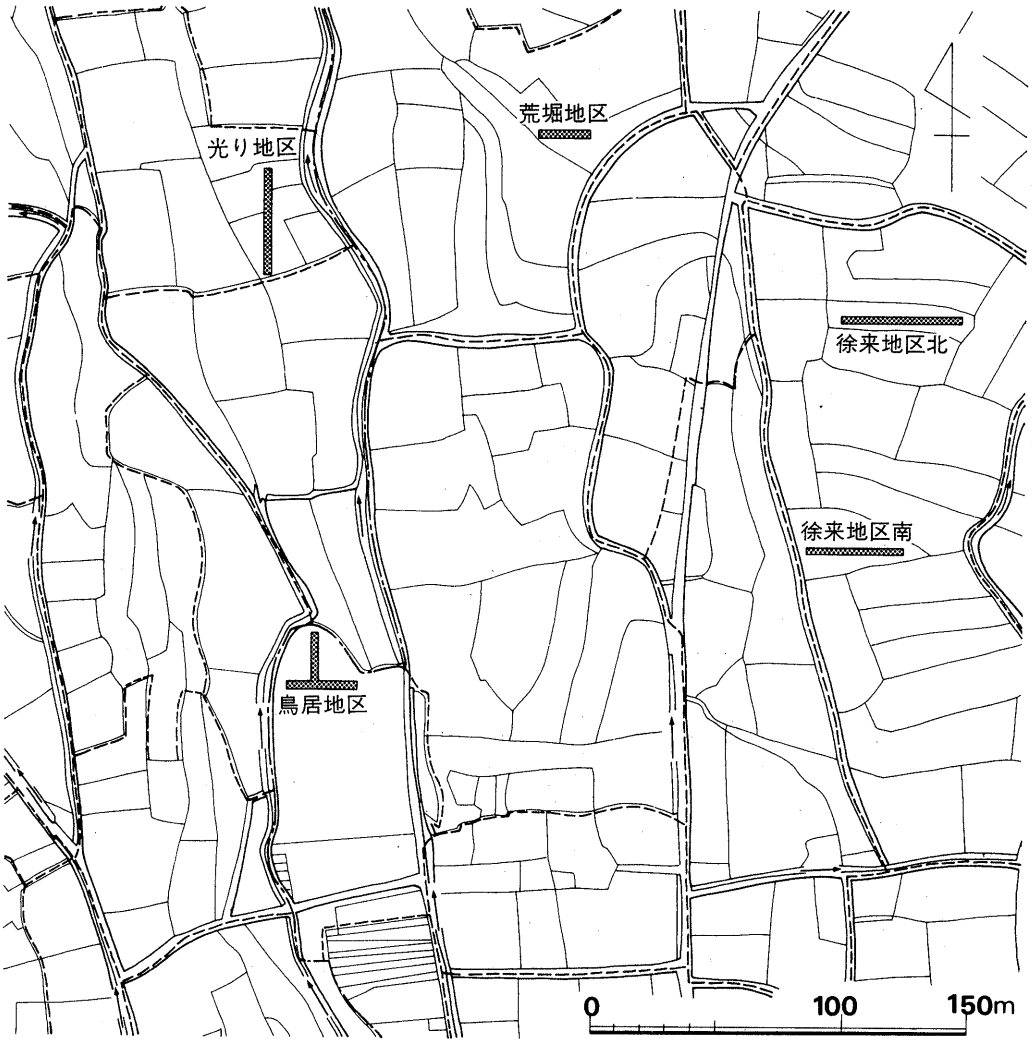
発掘調査は調査指導委員会の教示に従って10月25日から11月22日までの約1ヶ月間実施した。字鳥居・光り・荒堀・徐来地区で真北に基づいた３ｍ幅のトレンチを５ヶ所発掘したがその概要は次のとおりである（第３図)。

第２表　トレンチ一覧表

地区名	トレンチ（面積）	主な検出遺構
鳥　居	南北３×15＝ 45 東西３×27＝ 81	井戸２基・ピット・溝
光　り	南北３×43＝129	溝・ピット
荒　堀	東西３×23＝ 69	井戸２基
除来北	東西３×48＝144	礫群
除来南	東西３×38＝114	杭列

調査の関係者は次のとおりである。

総　　括	豊津町教育委員会	教育長(前)	桂　　募
		(現)	吉田無佐治
庶務担当	社会教育課	課長	山田　圀貴
		係長	坂田　重孝
		主事	秋吉　良晴
調査担当	福岡県立九州歴史資料館調査課	課長	石松　好雄
		主任技師	横田賢次郎
		技術主査	石丸　　洋
	福岡県教育庁京築教育事務所	技術主査	酒井　仁夫



第３図　トレンチ配置図（1/3,000）

第4図　基準点位置図（1/3,000）

Ⅲ．遺　　構

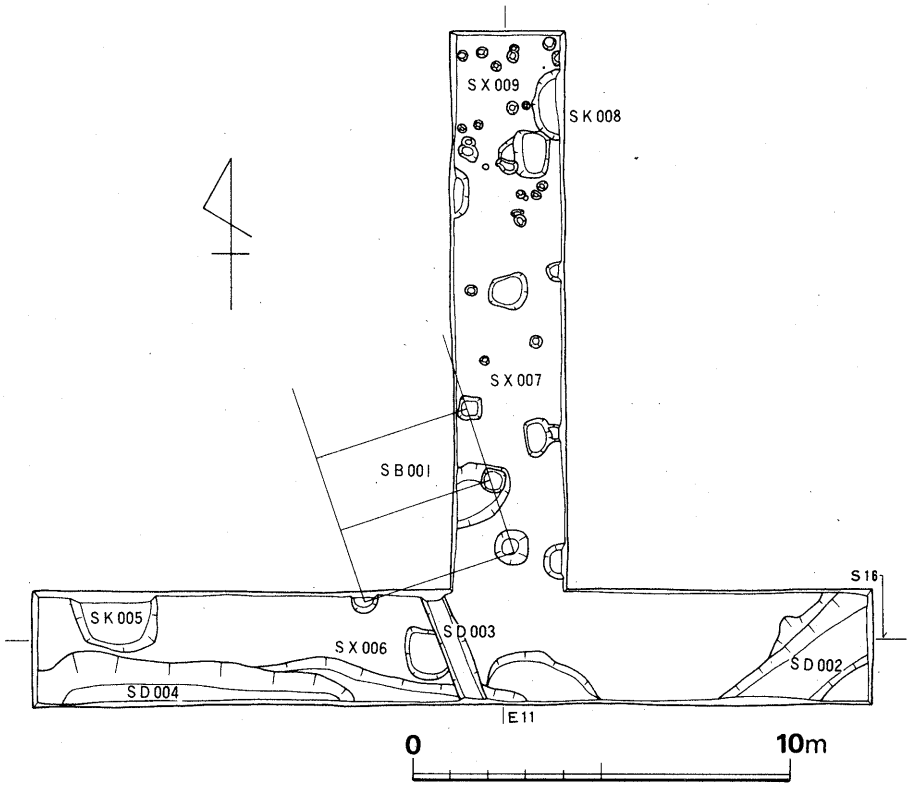
鳥居地区、光り地区、荒堀地区に各１本、徐来地区１：２本のトレンチを設定した。鳥居地区のトレンチのみは微高地上であるが、他のトレンチはいずれも水田面である。（トレンチの配置については第３図参照）

１．　鳥居地区（第５図）

惣社八幡宮境内から北へ延びた微高地の先端部に位置する。表土の下はすぐ黄色の固い地山層となる。地山面は西から東方向へと傾斜している。検出された遺構は建物１棟と溝・土壙・ピット群である。

掘立柱建物

ＳＢ001　調査区の中央で検出した南北棟建物で、２間（4.2m）×２間（4.0m）以上の規模になるものと考えられる。掘形はほぼ円形で、地山面からの深さは20～30cmである。なお、柱痕



第５図　鳥居地区トレンチ図（1/200）

は確認されなかった。

溝

ＳＤ002　調査区東端で検出された北東一南西方向の溝である。上幅は約165cm、底幅110cmで断面梯形を呈する。底面はほぼ水平である。内部の堆積土は灰色の細砂質で非常に硬い土質であった。堆積土中からは７～８世紀の須恵器と12世紀の土師器が出土している。

ＳＤ003　調査区南部で検出された北西一南東方向の溝である。ＳＸ006とＳＤ004を切る。上幅60cmの断面Ｕ字形を呈し、深さ約40cmである。堆積土中より土師器が出土している。

ＳＤ004　調査区南北で検出された東西方向の溝で深さは約50cmであるが、調査区外へ延びるため、幅長さ共に不明、出土遺物はない。

土壙

ＳＫ005　ＳＤ004の北に接する土壙で、調査区外へ延びる。短上幅225cmの楕円形を呈し、断面擂鉢状である。中央部の深さは35cmである。内部の堆積土中からは７世紀の須恵器が出土している。

ＳＫ008　調査区北端で検出されたが東半は調査区外へ延びる。平面形は円形を呈すると考えられる。径は約200cm前後であろう。内部から土師器が一括出土した。12世紀のものである。

その他の遺構

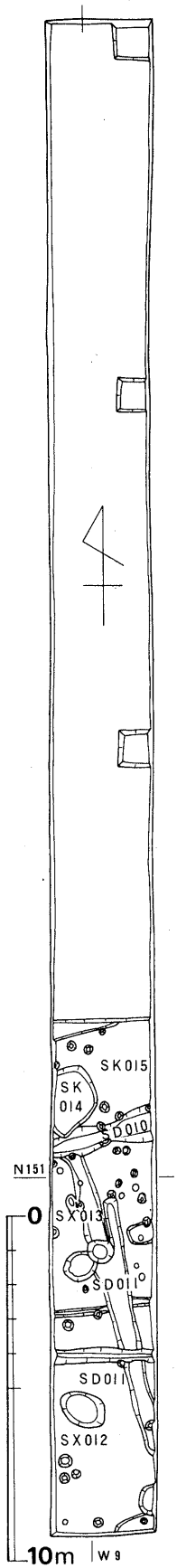
ＳＸ006　ＳＤ003に切られる不整方形の浅い落込みである。出土遺物はない。

ＳＸ007　調査区中央部のピット群である。いずれも深さ10cm程度の浅い落込みで、特にまとまるものではない.

ＳＸ009　調査区北端の小ピット群であり、特にまとまるものではない。

２．　光り地区（第６・７図）

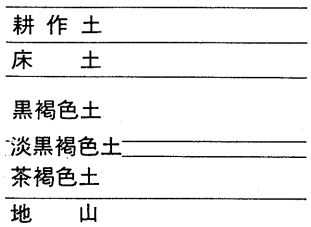
鳥居地区の北方150～190ｍに位置する南北トレンチで、表土の標高は25.60ｍである。南端では床下直下で赤褐色の地山となるが、北に向うにつれて地山は下向し、床土下には黒褐色粘質土が厚みを増している。この土層中には平安時代後半の遺物を多く含まっている。トレンチ中央部から北側では茶褐色粘質土が黒褐色粘質土の下にさらに堆積している。この茶褐色粘質土層は一部で掘り下げたのみであるが、奈良時代の瓦を含んでおり、



第６図　光り地区トレンチ図（1/200）

当該時期に属する土層ではないかと考えられる。なおトレンチ北端では両層間に淡黒褐色土を夾在させており、茶褐色土層は著しく厚みを増し、地山が急激に落込んでいる事を示している（第７図）。

検出された遺構は溝・土壙その他である。



第７図 光り地区土層模式図

溝

ＳＤ010　トレンチに直交する略東西方向の溝で、底幅、深さは共に約30cmである。埋土は茶褐色粘質土である。床面からは須恵器高台杯２点が積み重ねた状態で出土した。８世紀に属すものである。

ＳＤ011　南北方向からやや西に偏してほぼ直線に延びており、床面レベルは僅かに北へ下向している。中央部を東西方向の２条の小溝で切られている。底幅は一部乱れるところもあるが約40～50cmであり、深さは10cm前後で浅い。埋土中より12世紀の土師器が出土している。

土壙

ＳＫ014　一部発掘区外へ延びるが、不整形を呈し、断面は浅い摺鉢状である。出土遺物はなく時期は不明である。

その他の遺構

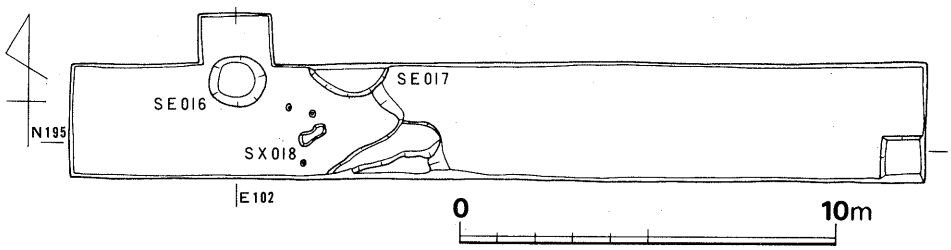
ＳＸ012　トレンチ南端のピット群である。特にまとまりを持って配列するピット群ではないが、埋土が黒褐色を呈するものと茶褐色を呈するものがあり、前者が新しい。

ＳＸ013　ＳＤ011周辺のピット群である。これらも特にまとまりを持つものではない。グループ中央の円形ピット中からは土師器・須恵器に伴って硯片が出土した。

ＳＸ015　ＳＤ010北方のピット群であり、埋土は黒褐色土である。

３．　荒堀地区（第８・９図）

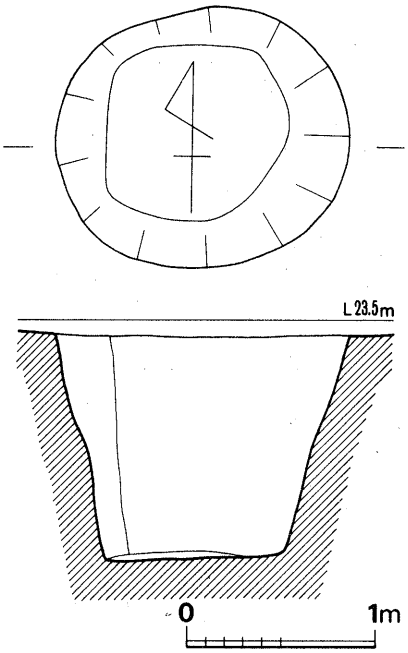
鳥居地区の北方200ｍ、東方75～97ｍ位置する東西トレンチである。表土の標高は23.5ｍで調査区中最も低位である。トレンチの西側では床下直下で黄褐色の地山となるが東側では黒褐



第８図　荒堀地区トレンチ図（1/200）

色土さらに泥炭層状になり、東端では現地表面より約1.8mで地山に突き当る。つまり、荒堀地区と微高地である御所地区との間に小谷が入り込んでいると考えられる。

検出された遺構は井戸とピット群である。



第9図　SE016井戸実測図(1/40)

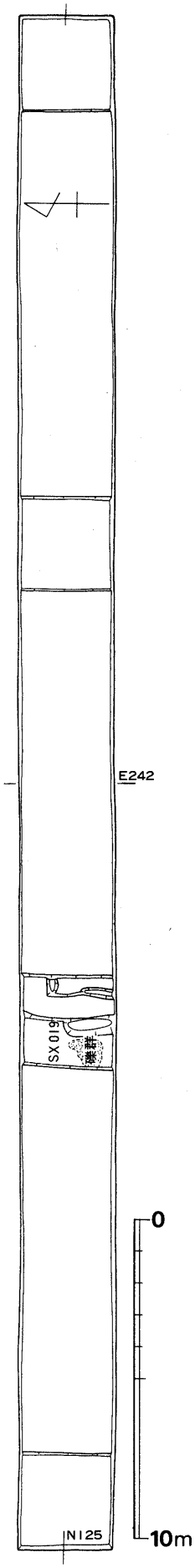
井戸

SE016(第9図) 円形の素掘り井戸である。口径1.55×1.35m、底径0.95×0.92m、深さ1.15mである。内部には多量の枕状河原石を投げ込んでおり、意識的に埋めもどしたものと思われる。石に混じって多量の土器や木片が出土したが、中に忌札を含んでいた。12世紀のものである。

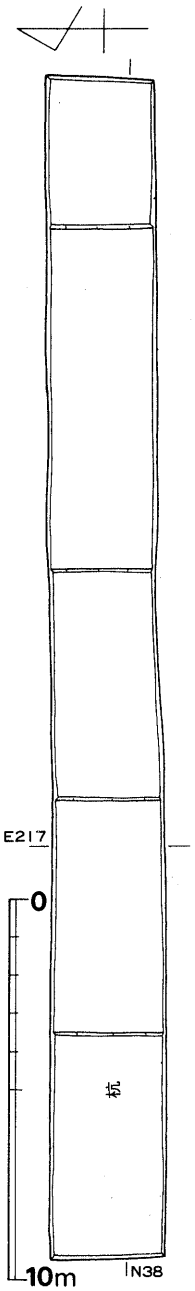
SE017　SE016の東に接して検出された円形の素掘り井戸である。約⅔が調査区外へ広がるので、平面プランを確認したのみで完掘しなかった。

その他の遺構

SX018　井戸南側の小ピット群である。特にまとまりはない。



第10図　除来地区北トレンチ図(1/200)



第11図　除来地区南トレンチ図(1/200)

4．　徐来地区（第10・11図）

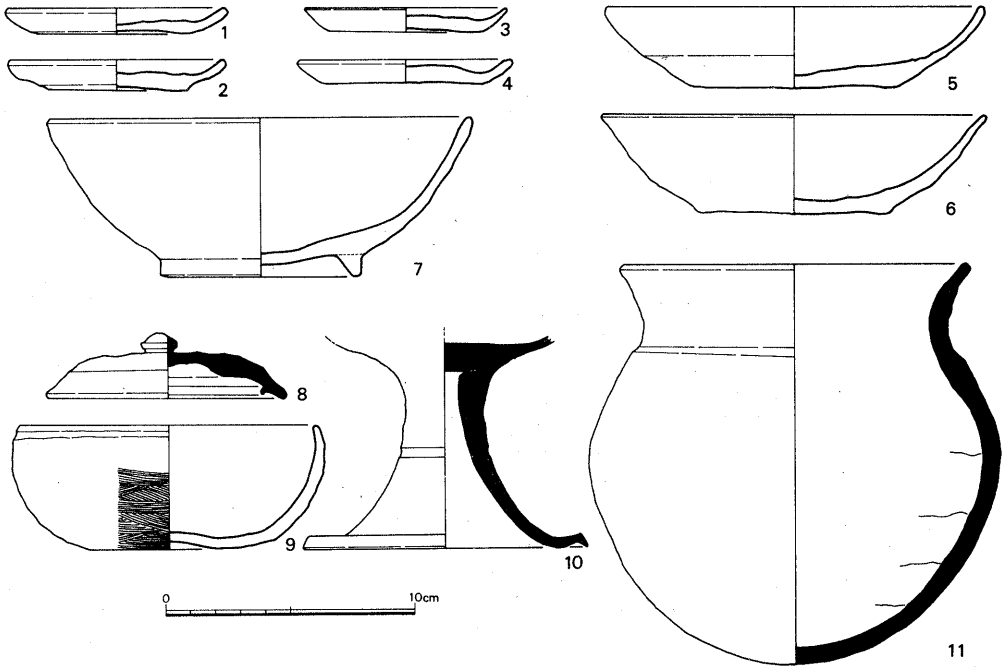
微高地である御所から約３ｍ下がった東側の水田面で２本の東西トレンチを発掘した。北トレンチの表土標高は23.65ｍ、南のそれは24.45ｍである。北トレンチでは床土下で暗褐色粘質土となる。この層中に含まれる遺物は極めて少ない。粘質土の下は黄褐色の砂質土となる。

トレンチの中央部で暗褐色粘質土を掘り下げたところ、礫群他の遺構が検出された。

ＳＸ019　南北方向の畦状高まりが走る。上幅約70cm、高さ約10cmで、両側に幅の狭い溝が接している。西側溝中からは５世紀の土師器が１点だけ出土している。なお、この溝の西側では小円礫が集中して出土した。性格は不明である。

南トレンチでは床土下が黒色の粘質土となり、多量の土器を含んでいる。その下層に砂礫層を部分的に夾んだ黒褐色粘質土が堆積している。この層中には板片や削り屑、燃えさしの杭等を含んでいる。このトレンチでは遺構は発見されず、国府（庁）推定範囲外のヘドロ堆積範囲を物語るのではないかと思われる。

Ⅳ．遺　　物



第12図　鳥居地区出土土器実測図

1．　鳥居地区出土土器（第12図・図版９）

土師器

皿（１～４）　全て糸切りで、口径8.0cm～8.8cm、器高1.0～1.2cm。全体に焼成が悪く、調整等については不明瞭である。土壙ＳＫ008出土。

杯（５・６）　口径15.2cm～15.4cm、器高3.2cm～4.0cm、底径8.0cm前後で、底径が小さい杯である。５は口縁部がやや内弯し、内底の一部にヘラナデらしき痕跡が不明瞭ながら観察できる。５は土壙ＳＫ008、６は溝ＳＤ002出土である。

瓦器

椀（７）　口径17.0cm、器高6.3cmで、内外面をヘラミガキする。内面は丁寧で、外面はやや粗いミガキである。暗灰色を呈し、焼成は良好である。土壙ＳＫ008出土である。

椀（９）　口径12.0cm、器高5.0cmで、外面は粗い刷毛目調整を施す。内面は風化が著しいため観察不能であるが、凹凸がみられる。胎土は精良で、赤茶色を呈する。溝ＳＤ003出土。古墳時代のものである。

須恵器

蓋（８）　口径12.0cm、器高2.6cmの身受けの返りを有する蓋である。外面の天井部は回転ヘラ削りする。やや軟質で、淡灰色を呈する。

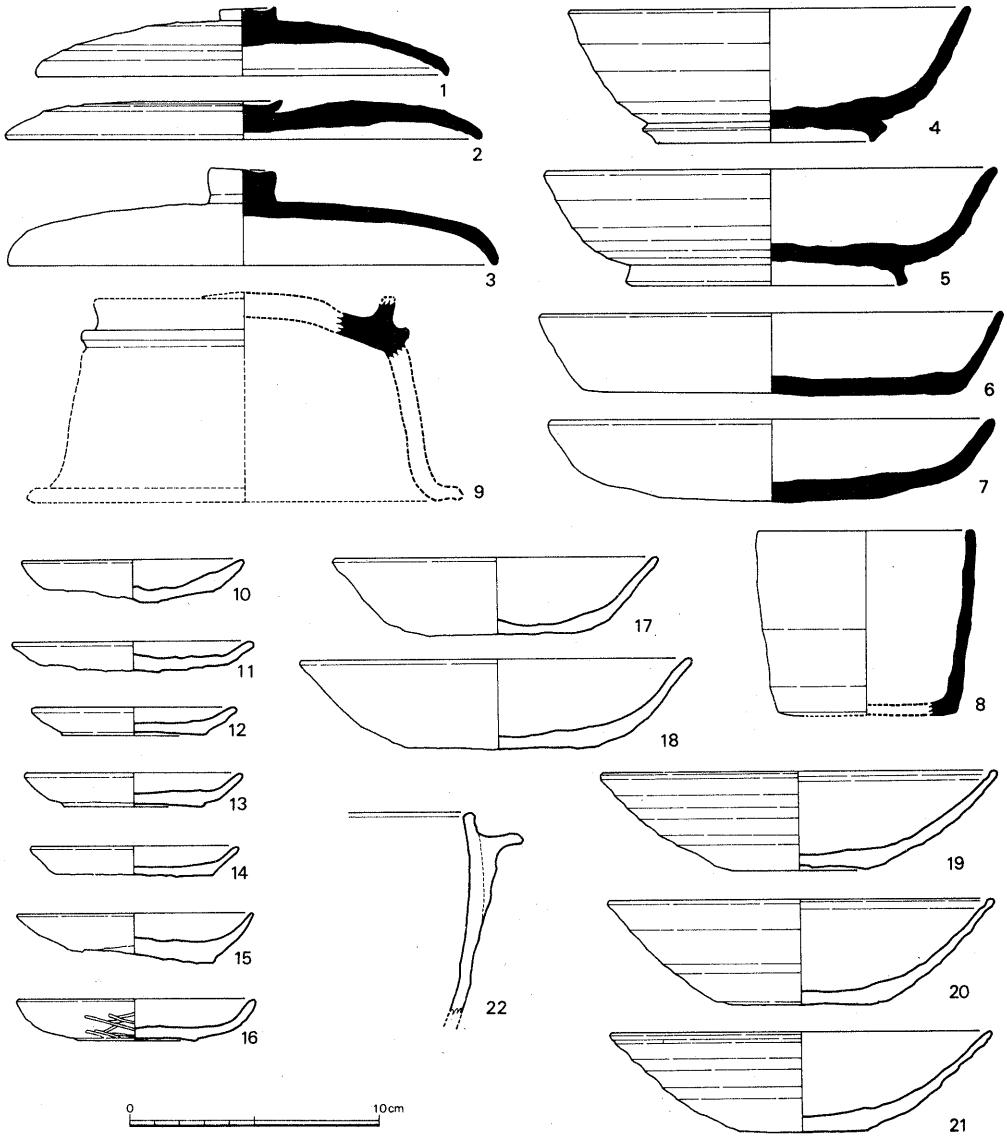
高杯（10）　脚部のみの破片で、脚端部を屈曲させ、端部は断面三角形を呈する。脚中位に沈線一条を巡らす。細砂を含み、焼成は良好である。溝ＳＤ002出土。

壺（11）　特殊な形態を示す完形の壺である。口径14.0cm、器高16.0cmで、体部上位に最大径（16.4cm）がある。口縁部はヨコナデで、中位を肥厚させる。外面の体部上位はヨコナデで、中位以下および底部は粗い手持ヘラ削りする。内面には粘土巻き上げの痕跡が明瞭に残る。胎土には細砂粒を含み、焼成は軟質で、淡灰色を呈する。土師器の形態に似た特殊な壺である。溝ＳＤ002出土。

2．　光り地区出土土器（第13図・図版10）

須恵器

蓋（１～３）　１・２は口縁部をわずかに曲げるだけで境は不明瞭で、退化している。天井部は回転ヘラケズリ調整し、口縁部および内面はヨコナデである。１は口径16.5cm、器高2.7cm、２はやや大きく口径19.0cm、器高1.5cmである。1の胎土は精良であるが２はやや砂粒の混入が目立つ。３は口縁部を大きく曲げるものの、境は明瞭でない。口径19.6cm、器高3.9cm。生



第13図　光り地区出土土器実測図

焼けのため赤茶色を呈し、器面の調整は観察できない。1はピットＳＸ013、2は床土、3は溝ＳＤ010出土である。

杯（４・５）　４は口径16.0cm、器高5.2cmで、体部下位に丸味をもち、体部から口縁部をほぼ直線的にする。高台はやや特異な形態で、外面をヨコナデにより斜めにする。5は口径18.0cm、器高4.6cmで、口縁部を若干外反させる。高台はヘラ削り調整した後に貼付する。両者とも胎土は精良で、成形・調整とも良好である。溝ＳＤ010出土。

皿（６・７）　６は口径18.6cm、器高3.2cmで、内底はナデで、外底は周縁部を回転ヘラ削りし、中心部付近を部分的に手持ちヘラ削り調整している。胎土には若干の砂粒を含むが比較的精良で、焼成も良好である。７は生焼けのため器面の調整については不明である。口径17.8cm、器高3.3cm。いずれも黒褐色土層出土。

杯（８）　口径8.8cm、器高7.3cmに復原したが、体部から口縁部にかけてはやや外傾する可能性があり口径も図より若干大きくなると思われる。口縁部はやや内湾気味で、端部は平らにする。全体はヨコナデにより成形するが、外面の体部下位と底部はヘラ削り調整する。溝ＳＤ011出土。

硯（９）

硯部の少片で全形が不明であるが図のような復原を行った。硯部と圏台部の境界付近に外堤と断面三角形の凸帯を貼付している。残存部からみると硯部と圏台部を同時に成形するものと考えられる。胎土には砂粒を含まず焼成も良好である。ピットＳＸ013出土。

土師器

皿（10～16）　10・11はヘラ切り、12～16は糸切りである。10・11は口径9.0cm～9.6cm、器高1.2cm～1.7cmで、内底をナデ調整し外底には板状圧痕を有する。胎土中に金雲母が混入する。12～13は口径8.2cm～9.6cm、器高1.1cm～1.7cmで、12・14は内底をナデ調整し底部には板状圧痕を有する。また15の外底は一部を指押えにより成形しようとしたのであろうか、指頭痕が残る。16はきわめて特殊な例で、底部を除いた内外面をヘラミガキする。口縁部内外面は回転によるもので、内底部は格子状に、外面体部は乱雑な粗いミガキを施す。胎土はきわめて精良で、焼成も良好である。

10・13はピット、11・14・16はNo.２黒色土層、12は溝ＳＤ011、15は黒褐色土層出土である。

杯（17～21）　17はヘラ切りで、口径13.0cm、器高3.1cmで、口縁部を若干外反させる。底部と体部との境がヨコナデにより凹状になり段状を呈する。胎土には砂粒の混入はみられないが焼成はやや悪く赤茶色を呈する。18～21は糸切り（21は不明瞭）で、口径15.2cm～15.8cm、器高3.5cm～4.2cm、底径5.2cm～7.7cmである。これらは口径に比して底径が小さくなる特徴を示すが、18については底径が7.7cmでやや大きく、内弯気味の体部と外反する口縁部を有する。19～21は強いヨコナデにより、外面には凹凸がみられ、19・20の口縁部内面は凹状にする。17はピットＳＸ013、18はピット、19～21は黒褐色土層出土である。

鍋（16）　鍔付の鍋で、口縁部はやや内弯する。器肉は薄く仕上げられている。外面には煤の付着が著しく、内面は黒化している。胎土中に雲母の混入が目立つ。黒褐色土層出土。

3．　荒堀地区出土土器・陶磁器（第14図・図版９）

土師器

皿（１～６）　１はヘラ切りで、３～５は糸切りである。１は口径8.8cm、器高1.1cmである。３～４は口径8.9cm～9.1cm、器高0.9cm～1.3cmである。３・４の内底はナデ調整し、板状圧痕を有する。５は口径9.6cm、器高1.9cmである。６は高台付皿で、口径15.4cm、器高３.０cmである。軟質であるため調整は不明瞭であるが、底部端に板状圧痕が残る。胎土は砂粒が目立ち器面は粗い。１・３・４は黒褐色土層出土、２・６は井戸ＳＥ016出土、５は井戸ＳＥ017出土である。

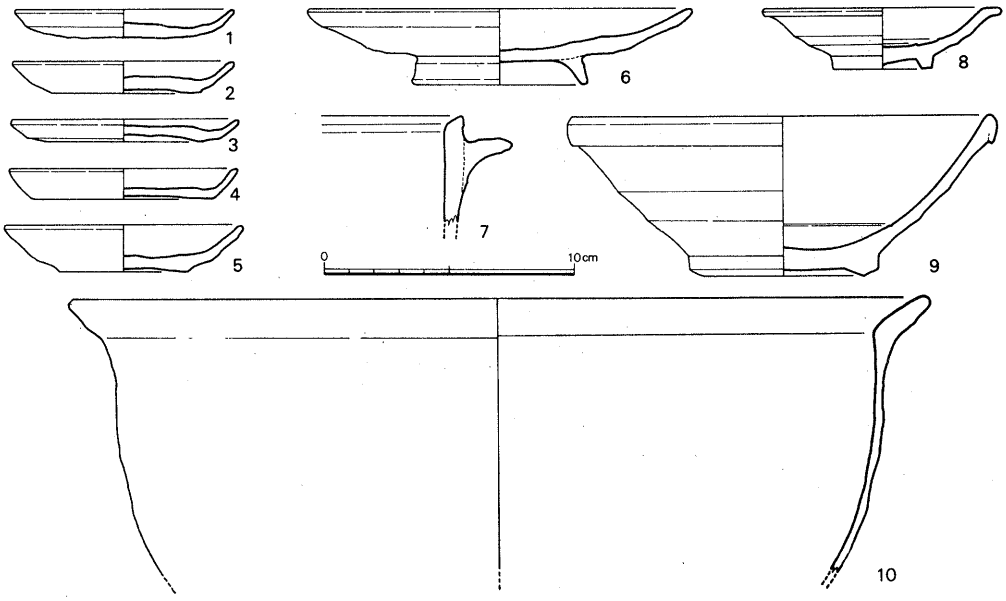
鍋（７・10）　７は鍔付の鍋であるが、少片であるため口径は不明である。内面は刷毛目、口縁部および鍔はヨコナデ調整である。また外面の鍔部と体部には煤が付着している。底部に三脚を貼付するものであろう。床土出土。10は復原口径45.6cmで、口縁部を「く」字状に外反させる鍋である。内面は指押えにより成形したのちナデ調整している。外面の口縁部から体部には煤が付着している。井戸ＳＥ016出土である。

陶磁器

白磁

皿（８）　灰白色の釉が施され、内底の見込みを輪状にカキ取り、外面体部下半を露胎とする。井戸ＳＥ016出土である。

椀（９）　口縁部を折り曲げ玉縁にする椀で、黄白色の紬がやや厚目に施されるが、外面の体部下半は露胎となっている。井戸ＳＥ016出土である。



第14図　荒堀地区出土土器陶磁器実測図（10のみ１/4）

4．　徐来地区出土土器（第15図・図版11）

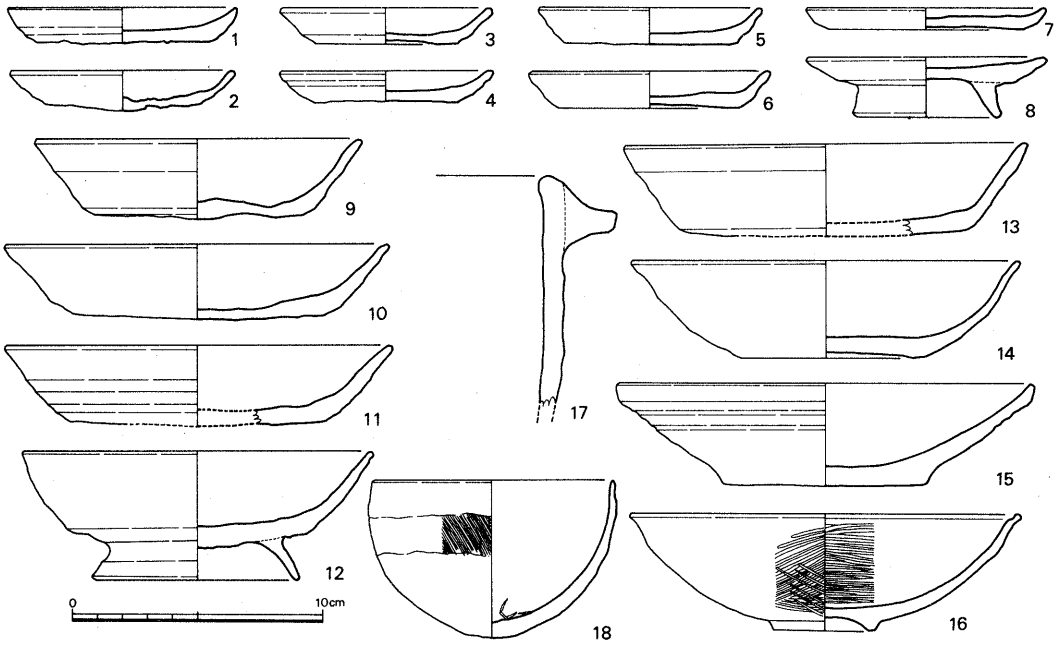
土師器

皿（1～8）　1・2はヘラ切りで、3～7は糸切りである。1･2は口径9.2cm、器高1.5cmで、1の内底はナデ調整し底部に板状圧痕を有する。3～7は口径8.6cm～9.6cm、器高0.9cm～1.5cmである。内底はナデ調整し底部に板状圧痕を有する。8は高台付皿で、口径9.6cm前後、器高2.4cm。

杯（9～15）　9～11はヘラ切りで、13～15は糸切りである。ヘラ切りでは口径13.0cm、器高3.2cmの9と口径15.4cm前後、器高3.0cm前後の10・11がある。9の内底はナデ調整し外底に板状圧痕を有す。14は口径15.4cm、器高3.8cmで、底径が小さく、口縁部を若干外反させる。15は口径16.6cm、器高4.0cmで底部は口径に比して小さく、口縁部の内面を凹状にする。

鍋（17）　鍔付の鍋である。鍔は口縁端近くに貼付する。内面はヘラナデの痕跡が残る。外面の残存部下位には粗い刷毛目がある。胎土は細砂粒を多く混入する。口縁部から体部は直立気味であるが、底部には脚を貼付すると思われる。

椀（18)(　口径9.6cm、器高6.2cmで、やや尖がり気味の丸底を呈する。内面の口縁部下半はヨコナデ後ヘラ状のもので器面調整したと考えられ、底部中心にヘラ状の痕跡がみられる。外面の口縁部はヨコナデであるが、それ以下は細かい刷毛目調整し、その後体部下半は粗く生乾



第15図　徐来地区出土土器実測図

燥時に削ったためか、ミガキ状に仕上げている。胎土中には砂粒の混入はなく精良で、焼成も良好である。

瓦器

椀（16）　内外面を漆黒色に燻した瓦器の椀である。口径15.6cm、器高4.6cm。口縁部は若干外反させ、内面に沈線を巡らす。内外面に細かいヘラミガキを施す。内面の口縁部と体部は細かいヨコ方向のミガキで、見込みには暗文が一部観察できる。胎土は黒色である。楠葉産の瓦器である。その中でも古期に属するものであろう。

以上18点の土器で1～17は南トレンチの黒色粘質土層出土。18は北トレンチの小溝SX019出土である。

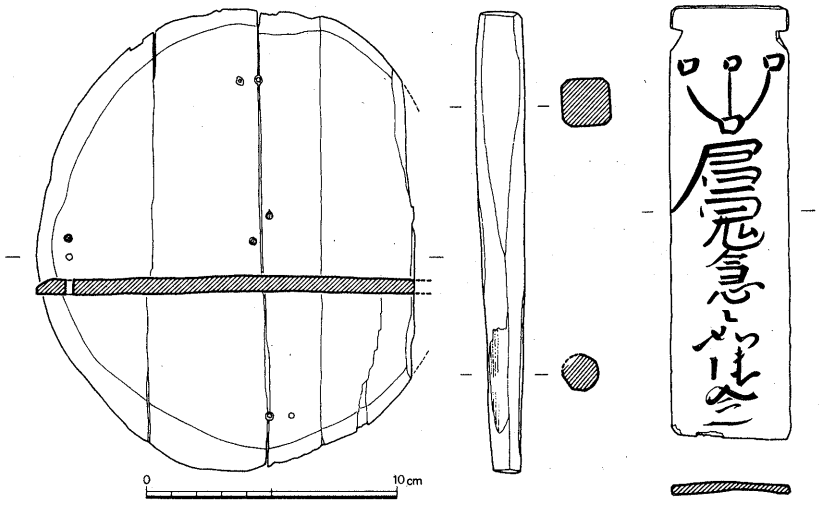
5．　木　製　品（第16図・図版12）

木製品は荒堀地区で検出した井戸ＳＥ016から出土した。

円形木板（１）　木目のつまった柾目材を加工したもの。周縁の内側に４個所、中心部の１個所にそれぞれ一対の孔を穿っている。中心部の孔には木釘を残す。表裏とも炭化しており、火中したものとみられる。折敷かとも考えられるが孔の位置、方向などに疑問がある。直径18.2cm、厚さ0.6cm。

棒状木製品（２）　上部は断面方形であるが、面取りを行っており隅丸方形を呈する。下半部は削りを加えてしだいに細くし、断面を円形にしている。両端は直に切り落す。長さ18.2cm。

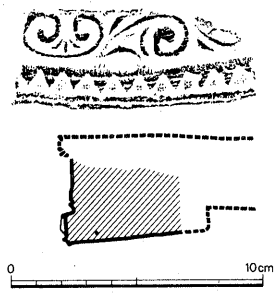
呪符（３）　板目材を加工したもので頂部よりやや下位の両側に「フ」字形の切込みを入れ



第16図　木製品実測図

る。両端は直に切り落す。片面に呪符を墨書きしているが、どのような占事を意図したものか不明である。地理的に求菩提山との関係も考えられ興味深い。呪符の福岡県内における出土例としては大宰府郭内の左郭九条六・七坊推定地出土のものがある。長さ17.0cm、幅4.7cm、厚さ0.4cm。

6. 瓦　　類（第17図・図版12）



第17図　軒平瓦実測図

今回の調査で出土した瓦類は鴻臚館式軒平瓦１点と若干の細片化した丸・平瓦である。

いわゆる鴻臚館式軒瓦とは、かつての大宰府鴻臚館跡に比定される福岡市中央区の平和台野球場付近を中心とした地域から多く発見されるところから設定された形式名称である。また近年発掘調査が進んでいる大宰府史跡の調査結果によると政庁跡を中心とした地域からも多量に発見され、政庁第II期すなわち８世紀初頭頃に造営された建物に葺かれていたことが明らかにされている。この鴻臚館式軒平瓦の文様構成は上に向って開く曲線文内に「小」字形の小葉を配したものを中心飾として、その左右に４回反転する唐草文を連ねた均正唐草文である。また上外区には杏仁様の珠文を、下外区には外向する凸鋸歯文を配する。今回出土したものは中心飾と下外区の凸鋸歯文の一部で、光り地区トレンチの黄褐色土層から出土した。小片であるため調整痕などの詳細については不明な点が多いが、ただ顎面については丁寧なヘラケズリを行っている。胎土は比較的精良である。瓦当面文様について大宰府出土のものと比較したところ同笵である可能性が強い。

丸・平瓦については凸面の叩き痕が縄目のものと格子目のものとがあるが、いずれも小片であるため詳細については不明である。

V．結　　語

豊前国府の所在地については主に条里制や地名、『和名抄』の記載等の関係から京都郡の須麿園・津熊、仲津郡の草場・惣社を各々中心とする4通りの説が論ぜられてきている。今回が初めての豊前国府に関する発掘調査であった由であるが調査範囲が極く狭く、また短期間の調査であったため当然の事ながら何ら決定的成果を上げるに至らなかった。しかし、今回の調査は今後の長期間を要するであろう調査へ向けての僅かな一歩を印したという意味では有意義であったと考えている。(1)

ここでは近年の研究、特に木下良氏と木原武雄氏の諸論を骨幹として、惣社・国作を中心とした地域に豊前国府があった可能性を強調してみたい。なお、この地域の地名やかつての考古学的調査資料や採集資料については第Ⅰ章で記したので重複を避ける。国府域や国庁域については判断資料を持っていないので、これまで発表された資料を紹介するのみである。

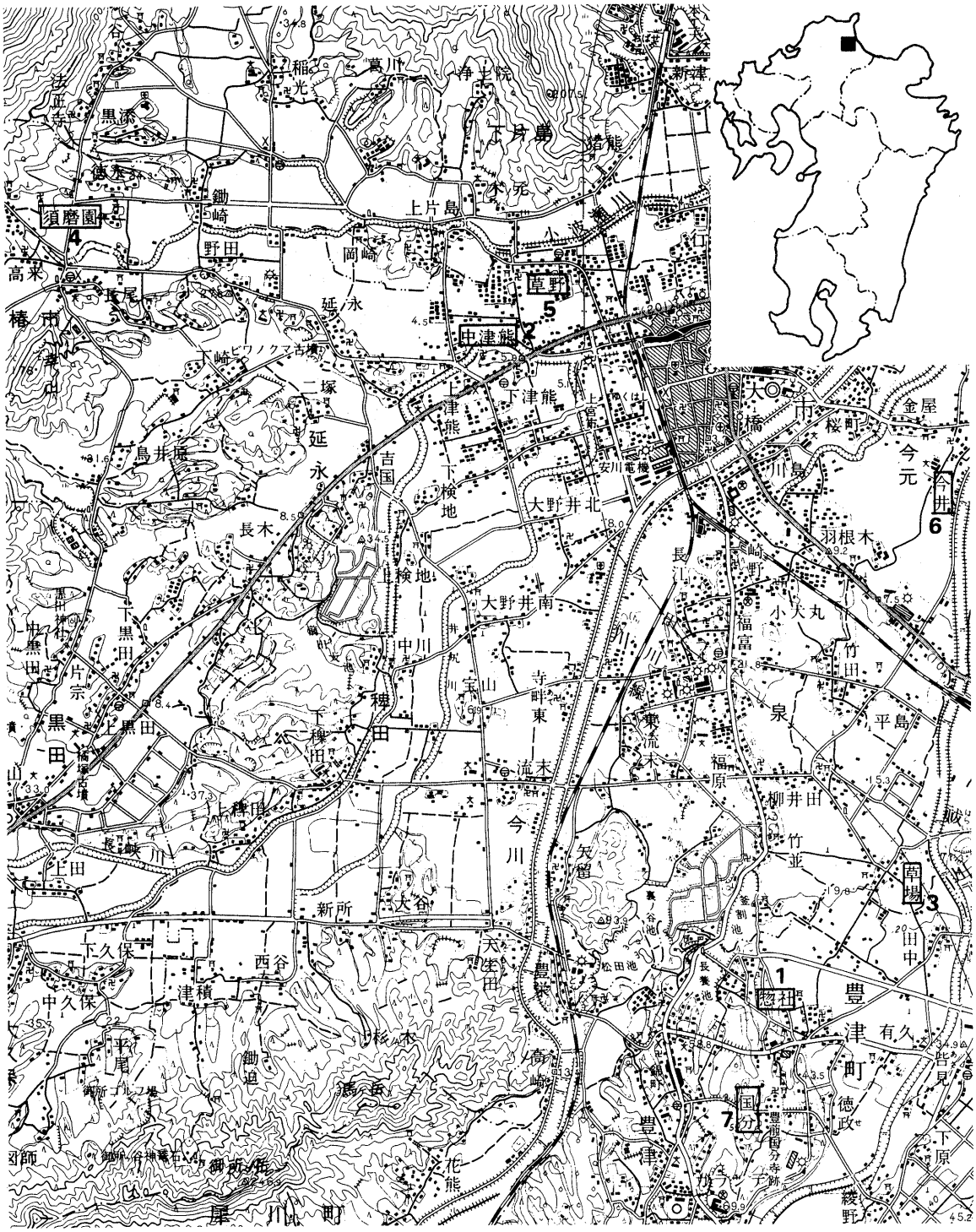
豊前国府所在地についての既往の説は白石寿氏の「豊前国府について」(註1)や木原武雄氏の「豊前国府についての一考察」(註2)及び最近の『大宰府管内国府の研究』(註3)に詳しい。

平野邦雄氏は「豊前の条里と国府」(註4)において『倭名類聚抄』中の「豊前国　国府在京都郡」の記事、京都郡内の現行橋市津熊周辺の条里地割に基づいて長峡川と井尻川にはさまれた津熊周辺の方10町を初期の豊前国府に考定し、川下の草野を国府津に、恒富八幡社を国府八幡社に推察したのである。京都郡津熊にあった国府は後に仲津郡草場に移転したとも論及し、その理由は秦氏から宇佐和気氏への古代勢力の交替、交通路の変遷によると解釈した。

これに対し、木下良氏は「豊前田府址についての一考察」(註5)において次の3点から反論している。第1点として山城国・大和国・甲斐国の例から「『和名抄』の国府所在郡は、郷名と同様に9世紀頃、特に山城の例よりすれば、貞観3（861）年以後の状況を示すもの……」であり、「従って、豊前の場合も京都郡にあったとする国府は9世紀中頃以後と考えられるが、この時期の国府は機能も現模も縮少しており、遺跡も明らかでない場合が多い。」と断じている。

第2点に条里地割と国府条坊の方位の差について、下野図や肥前国のように例外を認めつつも、「諸国の例よりみれば、南北方位をとるなり条里地割に対して、国府や国分寺の土地割が南北方位をとることによって起るのが一般の例である。」とし、平野氏復元の条里基線にも疑問を提している。

第3点は国府津と平野氏が考えた草野津に対し、「『和名抄（高山寺本）』に「仲津郡蒭野郷」があり、これが同所とすれば仲津郡内にあって、現在の草野とは別地になるわけである。」と判断している。

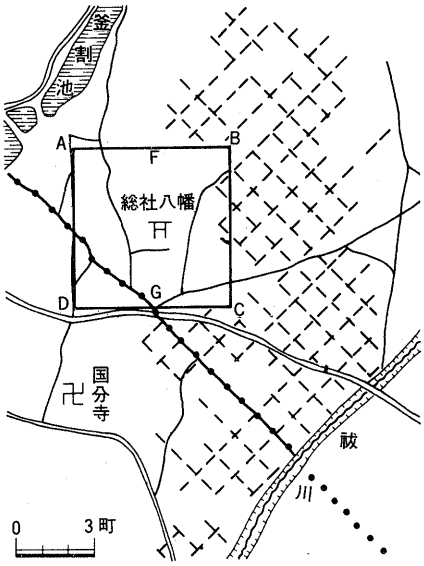


第18図　豊前国府関連推定地（1/50,000行橋）

以上木下良氏の津熊説に対する反論は決定打とは言えないまでも、かなりな有効打と考えられる。

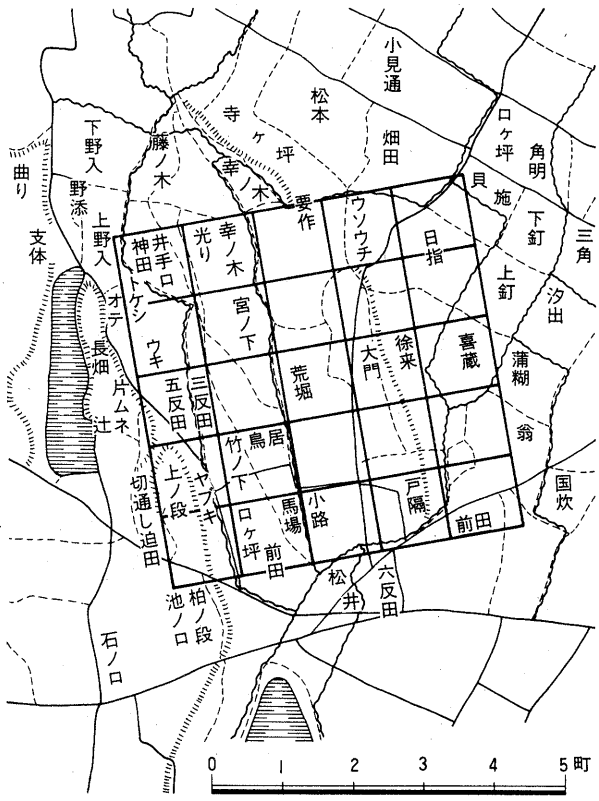
一方、木原武雄氏は最近の著述中においても、『倭名抄』の「豊前国　在京都郡」の記事に関して郡域の変更を主張(註6)し、「……豊前国府は創設当初から京都郡(現豊津町国作)に存在し、平安末期か鎌倉中期ごろまでに同郡草場(府中)へ移動した。(なお、この間、国府所在地たる国作地区は仲津郡へ編入された)……」と結んでいる。

なお、戸祭由美夫氏の京都郡須麿園説を提し、地名から方6町域の国府を考えているが、草野津や椿市廃寺との関連にしても理由はやや弱いように思われる(註7)。須麿園、椿市地域は京都郡内とはいえ小波瀬川流域の盆地状沖積平野の最奥部に位置し、船運をもってすれば苅田に通ずるしかなく、豊前国の中心たりえないと思えるからである。



第19図　推定豊前国府(仲津郡．A－B－C－D)
(日野尚志　1983　註10)

惣社八幡を含めた地域に豊前国府を求めた説は各説中最も多く発表されている。第19～22図は方5町あるいは方6町の差、南北中軸線の取り方に差はあるものの、いずれも北10°西の方位をとるプランを想定している。一方、武末純一氏と福岡県文化財地図によって(註8)(註9)図示された2種の府域はいずれも北33°～35°東の条里地割にそっている。いかなる理由によるものであろうか。



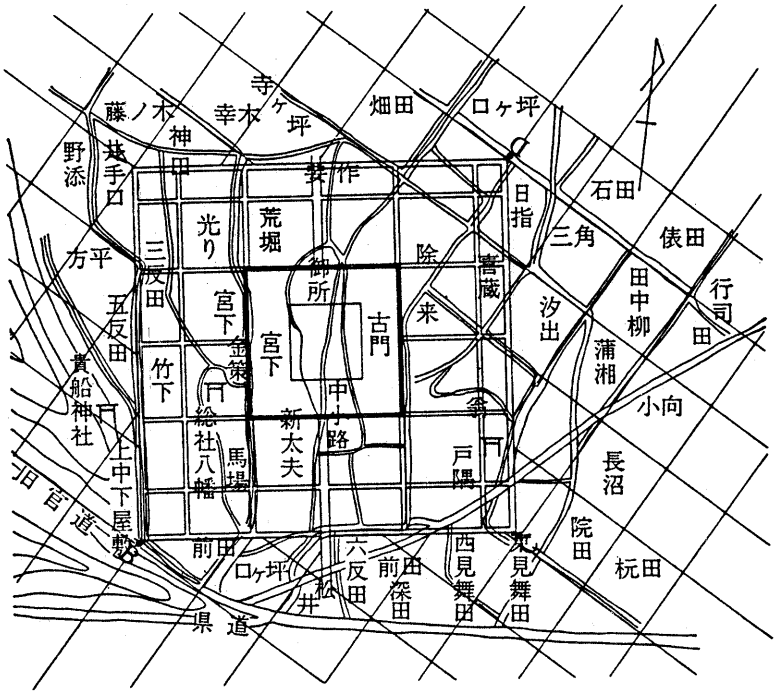
第20図　国作に想定する豊前国府址
(木下　良　1967　註11)

(2)

今回の発掘調査は初めに記したように豊前国府に対する小規模ながらも最初の科学的メスとなった由であるが、礎石や大型堀り方を持った建物を検出するに至っていないし、堀り込み地業の跡や基壇の発見もなされなかった。また大溝や築地の痕跡すら見られなか

った。

鳥居地区と光り地区の南部・荒堀地区の西部で若干の遺構を検出した。鳥居地区では小建物、井戸、土壙、小溝他を、光り地区では小溝、土壙他を、荒堀地区では井戸他を検出した。これらはいずれも12世紀後半の遺構と考えられる。なお、光り地区においては遺構内堆積土に黒褐色土と茶褐色土があり後者は12世紀前半以前に遡るものと思われる。



豊前国府（国作跡）条坊復元図想定
条里交点：条里方向北寄り36°交点においたため四至は北10°西となる。

第21図　豊前国府（国作跡）条坊復元図想定
条里交点：条里方向北36°交点においたため四至は北10°西となる。
（木原武雄　1982より　註３）

光り地区北部では北側へ向け、荒堀地区東部及び徐来地区では東側へ向け急激な地山落込みが認められた。このうち、光り地区の下層堆積層である茶褐色粘質土層中から８世紀前半に属する鴻臚館タイプの軒平瓦片が出土した。第１章で記した惣社八幡神社南側採集の瓦類について加味し、発掘地区周辺に奈良時代の瓦葺建物が存在した事を示す好資料と考えられる。上層の堆積層は黒色ないし黒褐色粘質土であり、12世紀後半の白磁・土師器を含んでいた。徐来地区の南トレンチでは同層から多量の加工木片と共に１個の黒色碁石が出土している。

荒堀地区検出井戸中からは多くの土師器に伴って曲げ物底板と側板が出土しているが、特に完形の忌札が意識的に投ぜられたと思われる枕大石中から発見されたことは古代末、中世初頭の信仰を考える上で興味深い。

上略記した遺構・遺物の他にも徐来地区北トレンチ中央部発見の５世紀に属する性格不明溝や鳥居地区では７世紀前半～中葉の須恵器の発見を得た。

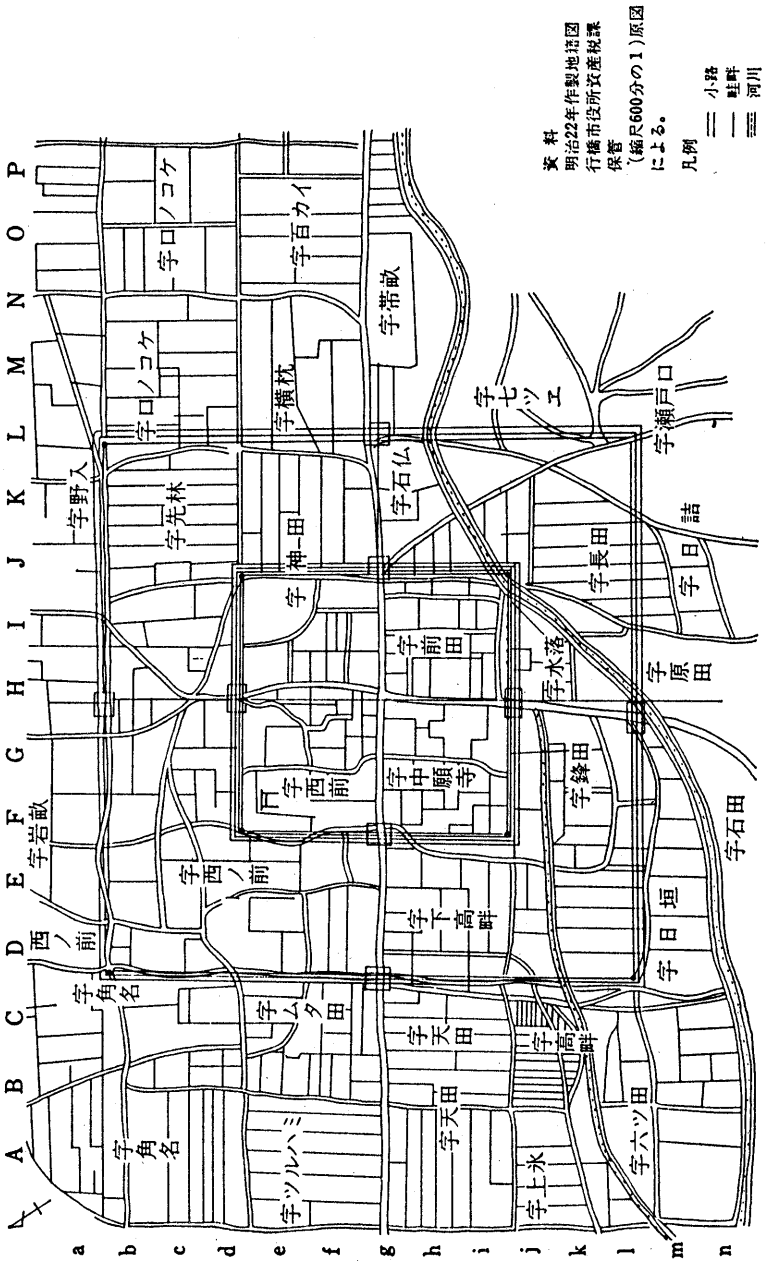
以上要約すると次の３点になるのではなかろうか。

１）　当地域に奈良時代以前の遺構が存在する。

2）　奈良時代の瓦葺建物が当地域内に存在する可能性が高い。

3）　12世紀後半代の遺跡が当地域に広く存在する

今回の調査結果のみを鑑みると9～11世紀を中心とした時期の遺構や遺物の発見が認められない。その点、昭和51(1976)年に発掘調査された今回調査区域の北側に臨接する幸木遺跡では9～10世紀の遺物を伴う南西－北東方向の溝の資料が参考になる。また川本義継氏によれば、草場地区の道路改修や民間宅地改造に当っては青磁片の出土を多く見たと言われる。いずれにしても豊前国府の解明のためには今後の息の長い地道な調査が必要であり、その重点は仲津郡の国作・惣社地区を中心とし、草場地区をも含めたところで行われるべきものと考える。



第22図　条里からみた草場跡
（木原武雄　1982より　註3）

註1　白石寿「豊前国府について」『美夜古文化』第17号　1966年

註2　木原武雄「豊前国府についての一考察」『美夜古文化』No.22　美夜古文化懇話会　1976年

註3　木原武雄「豊前国府」『大宰府管内国府の研究』日本学術振興会　1982年

註４　平野邦雄「豊前の条里と国府―古代政治勢力の所在をめぐって―」『九州工業大学研究報告（人文社会科学)』６　1958年

註５　木下良「豊前国府址についての一考察」『美夜古文化』第18号　1967年

註６　註３に同じ

註７　戸祭由美夫「豊前国府考」『歴史地理学研究と都市研究』上巻　1968年

註８　武末純一「豊前国府跡」『九州古瓦図録』

註９　福岡県教育委員会『福岡県文化財地図―行橋市・京都郡』

註10　日野尚志『西海道国府考』　1983年

註11　木下良「国府と条里との関係について」　1967年

図　　版

(1) 大山頂上より西方に国作地区を覗む（手前は祓川）

(2) 八景山より惣社地区を覗む

(3) 惣社八幡神社遠景（荒堀地区より）

図版２

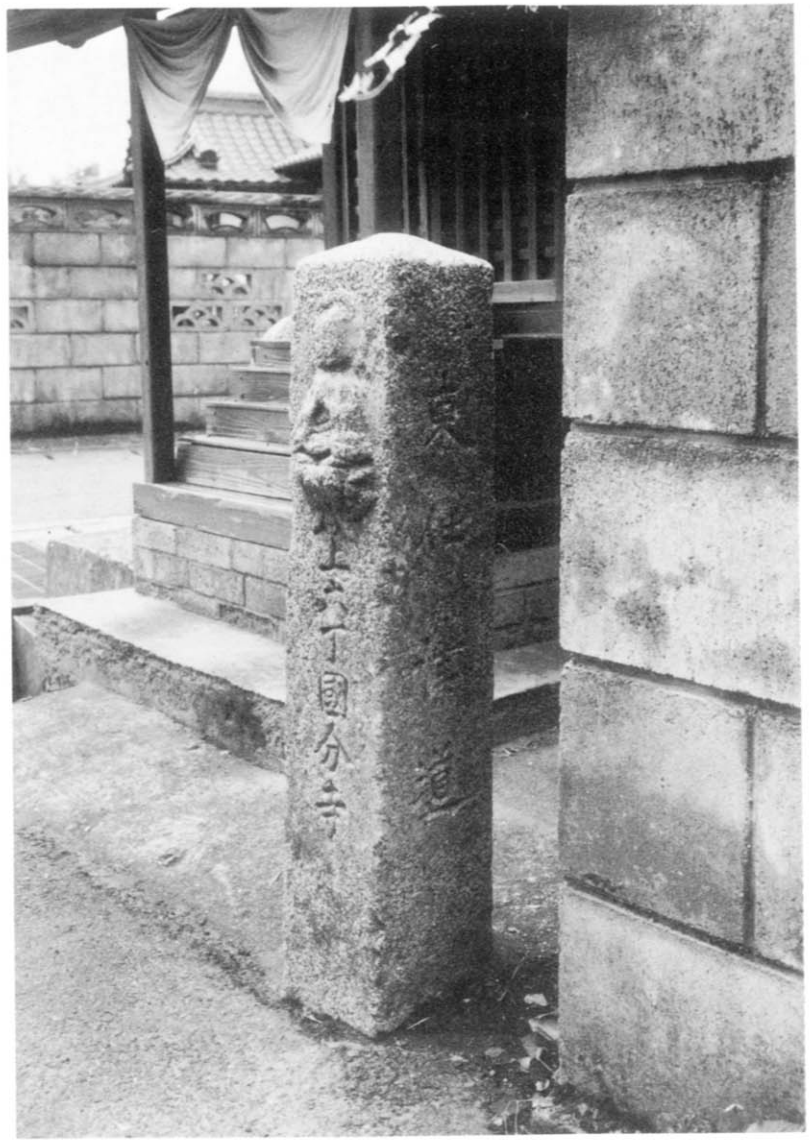
(1)　惣社八幡神社

(2)　貴布禰神社

(1) 翁 神 社

(2) 伽 藍 橋

(1) 伽藍橋横道標西面



(2) 同　南東面

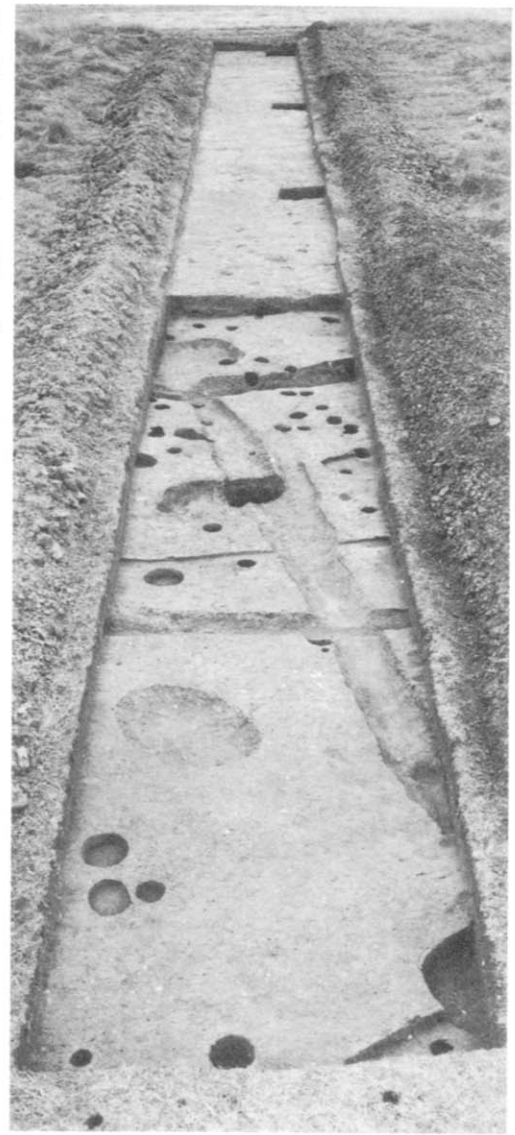
(上) 鳥居地区トレンチ（北より）

(下) 鳥居地区トレンチ（南より）

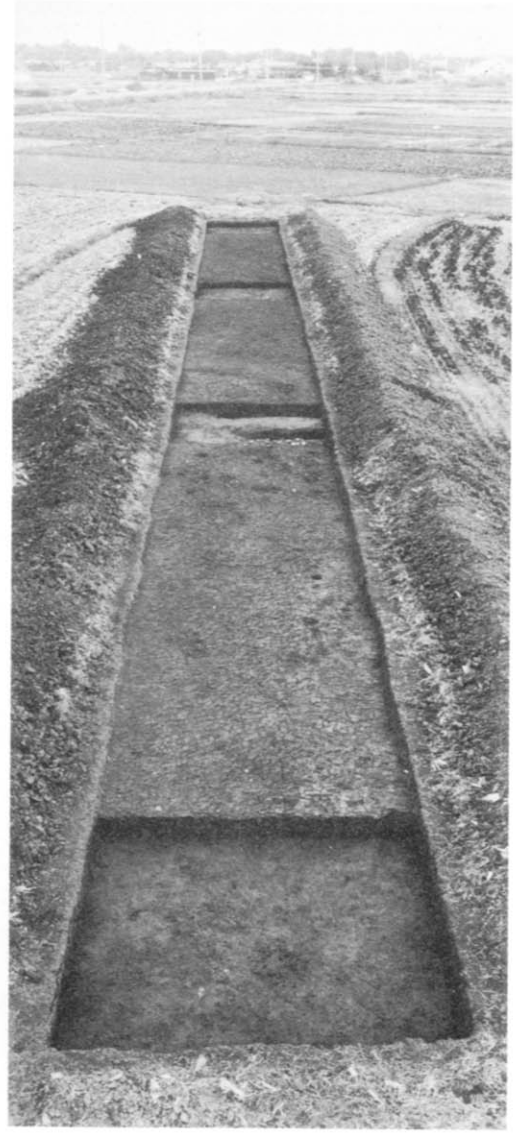
図版6

(1) 鳥居地区トレンチ（東より）

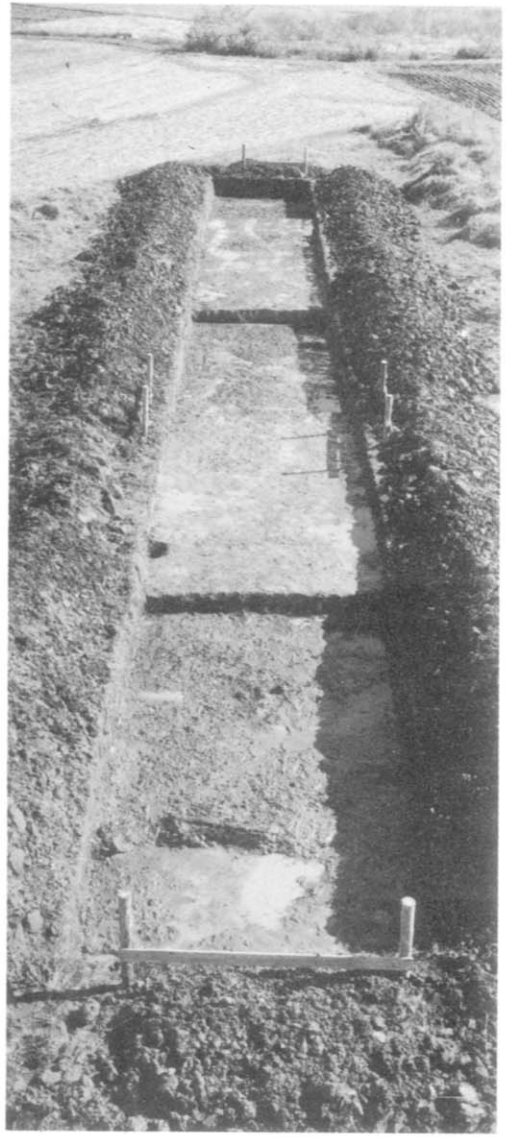
(2) 鳥居地区トレンチ（西より）



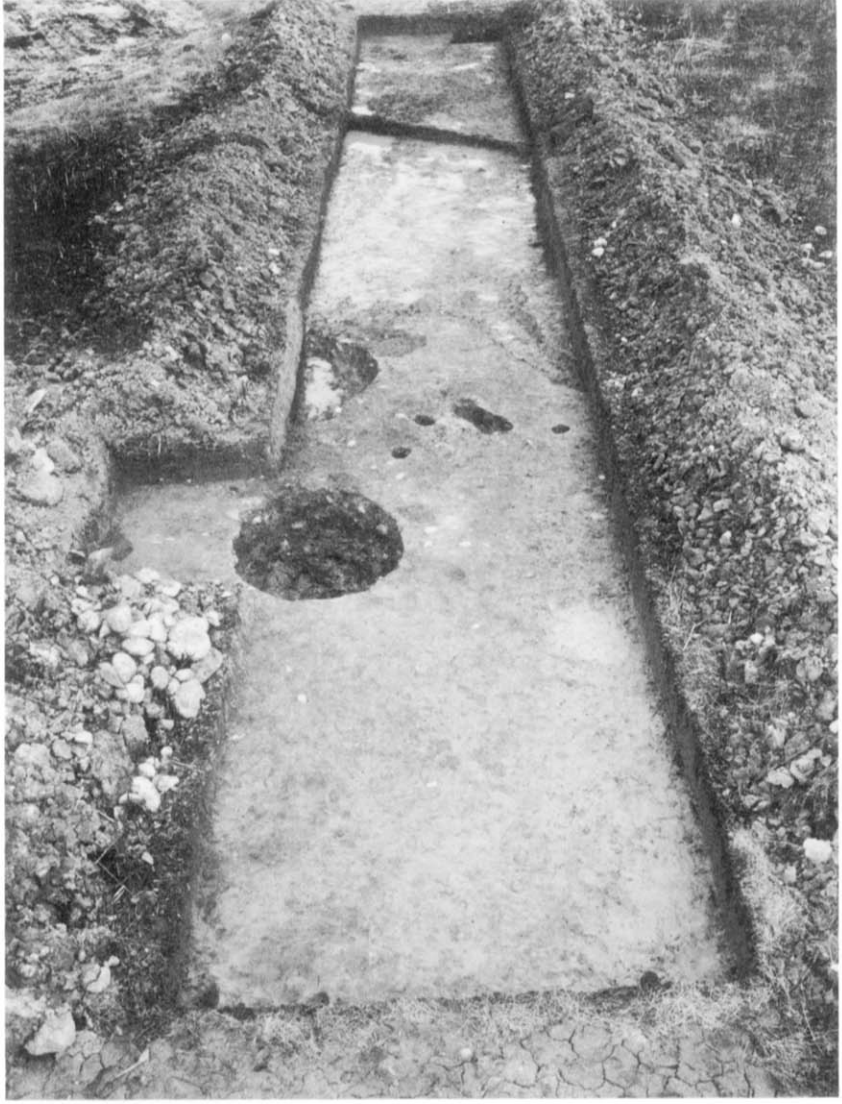
(1) 光り地区トレンチ（南より）



(2) 徐来地区北トレンチ（西より）

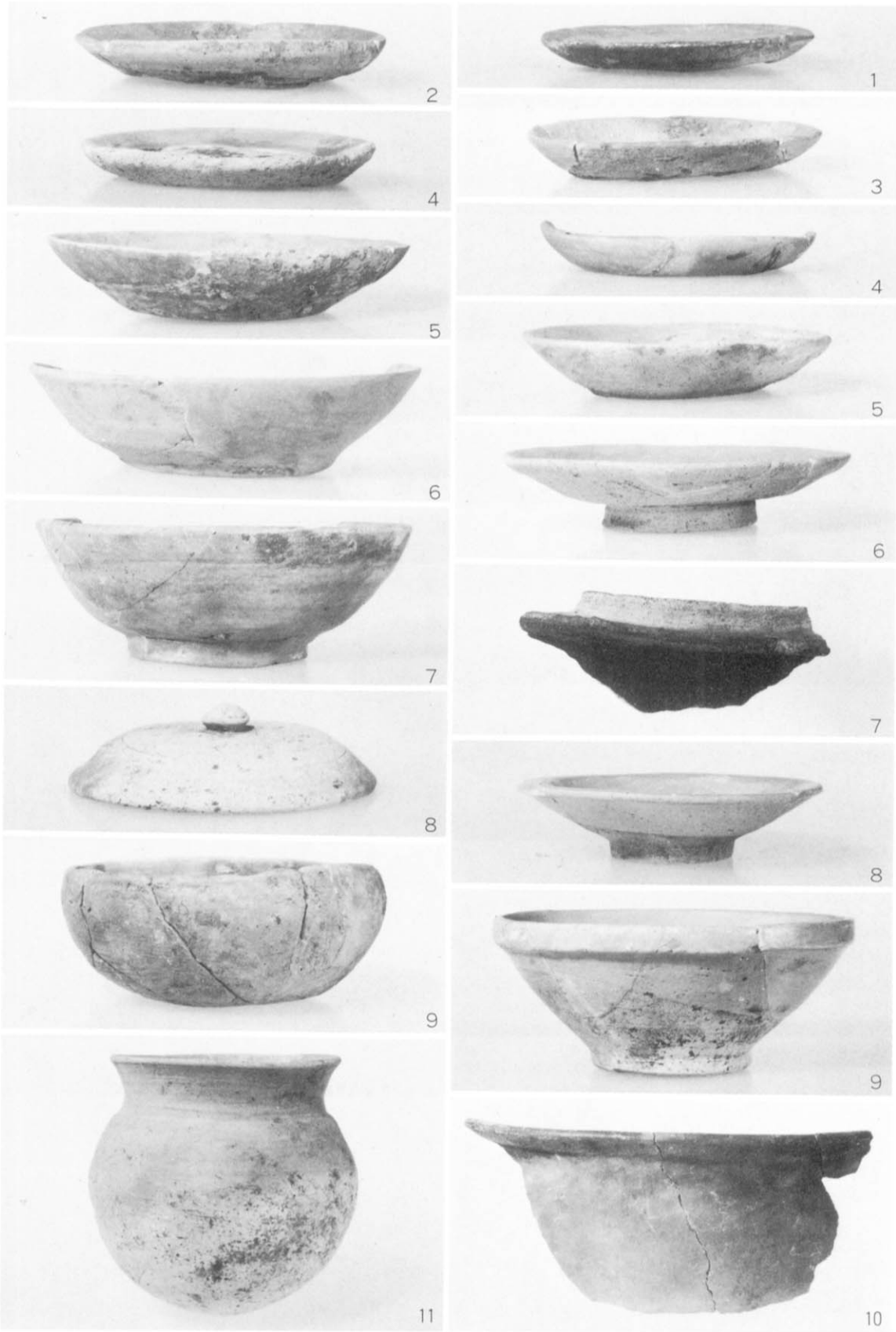


(3) 徐来地区南トレンチ（西より）

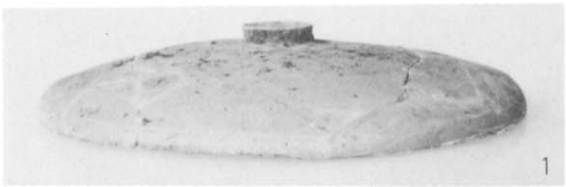


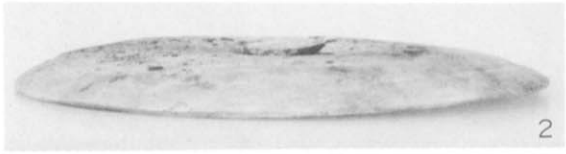
(上)　荒堀地区トレンチ
（西より）

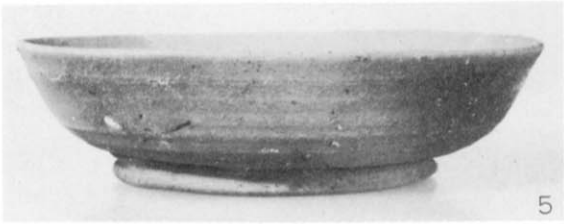
(下)　荒堀地区ＳＥ016

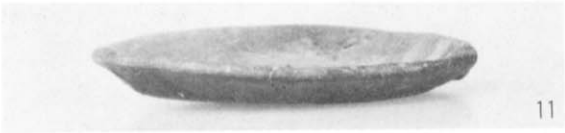


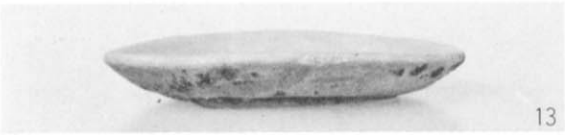
鳥居地区(左)・荒堀地区(右)出土土器・陶磁器

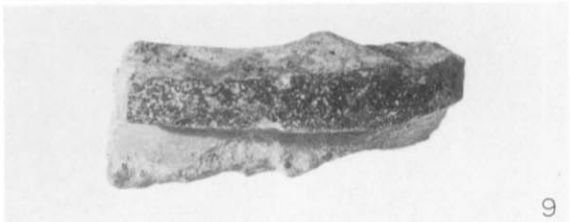


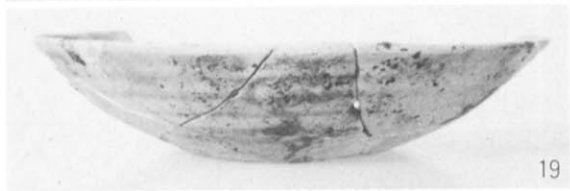


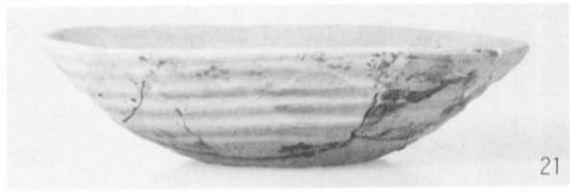








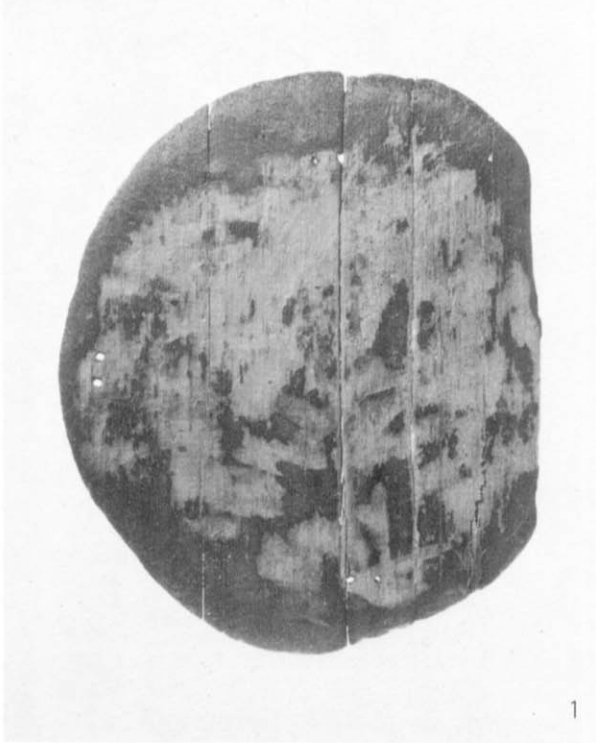




光り地区出土土器

徐来地区出土土器

3



1

2

ＳＥ016出土木製品・光り地区出土軒平瓦

豊　前　国　府

豊津町文化財調査報告書

1985年（昭和60年）3月30日

発　行　豊津町教育委員会
福岡県京都郡豊津町豊津

印　刷　青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31
電話 092（761）2431